

第1回ペットの文化とみらいを考えるシンポジウム

理論と実践に学ぶ

「子どもとペットのふれあい活動」 のノウハウと課題

平成26年12月13日（土）

14:00～16:30

東洋大学白山キャンパス2号館16F

スカイホール

主催

ペットの文化とみらいを考える
プロジェクト

プログラム

14 : 00~

開会挨拶

獣医師問題政治連盟委員長・(公社)日本獣医師会顧問 **北村直人**

基調講演 「これからの学校教育と動物飼育」

文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官 **田村学**

14 : 30~

事例講演

① 東京学芸大学附属 小金井小学校 副校長 **関田義博**

「小金井小学校における取り組み」

② (公社)日本愛玩動物協会 和歌山県支部 支部長 **山畑如矢**

「わうくらす取り組み(和歌山県動物愛護センター事業)」

③ (公社)日本愛玩動物協会 山梨県支部 支部長 **飯島英恵**

「ペットとのふれあい活動のノウハウと課題」

16 : 00~

質疑応答

<コーディネーター>

16 : 30

閉会

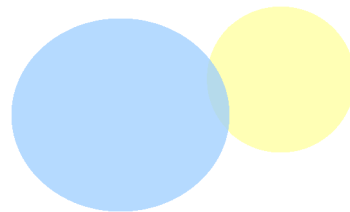
東洋大学国際地域学部国際観光学科教授・大学院研究科長

東海林克彦 (公益社団法人日本愛玩動物協会会長)

17 : 00~

懇親会 (希望者のみ、会費制 3000 円)

※プログラムは一部変更となる場合がございます



これからの学校教育と動物飼育

文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 田村学

1. 命を実感する

子どもたちは小さい頃から、「いのちは大事なんだよ」「いのちを大切にしろ」と繰り返し教えられて育つ。「いのちは大事」ということを言葉では知っている。しかし、どれだけ実感的に理解しているのか。

核家族化が進む中、子どもが人の生や死に直面する機会は少なくなっている。また、自然の中で遊ぶ機会も減り、自然の姿に驚かされたり感動したりすることも少ない。もちろん、動物を飼ったり植物を育てたりすることも少なくなり、責任をもって生命を預かることの重み、大切にしてきた命を失う悲しさ、そうしたかけがえのない経験が少なくなっている。いのちの大切さを頭でわかったつもりでいても、そのことを本当に実感することができないまま大きく成長する子どもの姿がある。

こうした現実の中、子どもが「いのち」をみつめ、感じ、考えることのできる学習の時間が欠かせない。そのためにも、動物を飼育したり、植物を栽培したりする学習活動を行うことを大切にしたい。

2. 生活科や総合的な学習の時間における動物飼育や植物栽培と子どもの姿

今回の改訂において、小学校低学年の生活科では、学習指導要領に生命の尊さを実感的に学ぶ観点から、継続的な飼育・栽培を行うことが明記された。このことは、これまでも行われていた生活科における「内容(7)動植物の飼育・栽培」を今まで以上に充実させようとするものの表れといえよう。また、総合的な学習の時間では、学習指導要領解説に学習課題の例として生命の神秘さや不思議さなどを記している。総合的な学習の時間においても、飼育活動や栽培活動を通して、身の回りの問題を本気になって解決していこうとする子どもの姿を具現しようとしている。

このことは、豊かな感性をもち、様々な価値観を形成していく過程にある子どもにとって、生き物にふれ、直接いのちを感じる時間が欠かせないことを物語っている。

3. 動物飼育や植物栽培が及ぼす影響

動物を飼育することや植物を栽培する活動が、子どもたちにとってどのような影響があるのかをいくつかの視点から考えてみよう。

(1) 日本生活科・総合的学習教育学会調査報告書

日本生活科・総合的学習教育学会では、平成17年2月に「生活科で育った学力について」の調査研究を報告している。この研究では、生活科で行ったどのような体験が記憶に残っているか、どのような力を身に付けているか、生活科に対してどのような思いをもっているかを確認しようと調査研究を進めたものである。生活科を学んだ小学生、中学生、高校生を対象に、インタビューや質問紙によって調査している。

その中に、「心に残る生活科の活動」を調査したデータがある。50%を超え心に残ると回答された活動は、多い順に次のようになっている。

○「飼育・栽活動」○「学校探検」○「公園や野原での遊び」○「収穫祭」○「昔遊び」

調査対象者別の「心に残る生活科の活動」にも栽培・飼育活動が入っている。

このことから、低学年の子どもにとって、植物を栽培することやその収穫をすること、動物を飼育することなどが強く印象に残り、いつまでも忘れることのできない記憶となっていることが分かる。

(2) 脳科学の知見

最近注目されている脳科学の知見においても、動物飼育などに関する話題がある。

人間の本能には愛着と恐怖という感情がある。恐怖は自己保存の本能であり、愛着は種の保存のための本能といえる。こうした本能以外に、エピソード体験が社会で生活していくために必要な脳の働きを高めていく。特に前頭連合野の神経発達が人として重要である。この前頭連合野の発達は、10歳くらいまでが最も重要な時期であり、いろいろな体験によるエピソード記憶によって形成されるといわれている。

エピソード記憶を培うに必要な体験として、「土、花、木、石、風、水、動物」の七つを上げることができる。すなわち自然体験である。特に、注目すべきは最後の「動物」である。なぜならば、前の六つと比べて「動物」には意志があり、子どもの思うようにできないところがある。子どもがいくら泣きわめいて「ほしい」といっても、動物がそれを許さなければ手に入れることが難しい。これらについては、「動物飼育と教育 第11号」（全国学校飼育動物研究会、平成21年12月）に詳しいので、参考にさせていただきたい。

(3) 子どもの自信を育てること

生活科で動物を飼育してきた子どもが、それまでの活動を振り返り、次の手紙を書いた。

「お母さん、いつも〇〇を見守ってくれてありがとう。ぼくは、お母さんの手紙を見たら、ちょっと泣いちゃったけど、とてもいい手紙だったよ。お母さんとお父さんが休みの時のとうばんの仕事を手伝ってくれたから、ぼくはやる気が出てがんばれました。12月3日のおわかれの日まで、ほんとうにありがとう。つらい時も、かなしい時も、うれしい時も、さびしい時も、さむい時も、あつい時も、がんばってのりこえて、やってここまでそだてることができました。いやなことも進んでやることができました。」

動物をクラスの友達や家族と力を合わせて育て、そこに起きる問題を乗り越え、無事に育て上げることができた自信が手紙の端々から感じられる。この自信は、経験的にも、時間的にも、子どもにとって適度の難易度があったからだと考えることができよう。また、動物を飼育するという活動の性質もあるだろう。どちらにせよ、動物を飼育する活動が適切に行われることにより、子どもが確かな自信をはぐくんでいくことが期待できる。

一方、この自信に関しては、わが国の子どもに十分に育てることができていないという指摘がある。それは、OECDのPISA調査の質問紙調査等の結果にも見ることができる。また、「日本の子どもの自尊感情はなぜ低いのか」（光文社）にも複数のデータが紹介されている。そこには、日本の子どもの自尊感情が低いこと、それも学年を追うごとに下がっていくことなどが指摘されている。



文部科学省初等中等教育局教育課程課 教科調査官 **田村学**

■略歴

1962年新潟県生まれ。新潟大学教育学部卒業後、上越市立大手町小学校教諭、上越教育大附属小学校教官などを経て、新潟県柏崎市教育委員会指導主事。2005年から現職。国立教育政策研究所 教育課程調査官も併任。

附属小金井小学校での取り組み

— 動物ふれあい学習を充実させるために —

東京学芸大学附属小金井小学校 副校長 関田義博

小学校学習指導要領には、「生活科の学習では動物や植物へのかかわり方が深まるよう、継続的な飼育、栽培を行うこと」という内容が明記されている。ところが、植物ではチューリップやジャガイモ等の栽培が年度をまたいで行われることがあるものの、動物では恒温動物と長期にわたってふれあい学習は十分行われていないのが現状である。その主な理由としては、動物飼育の知識を持った教員が少ないこと、世話に手間がかかること、鳥インフルエンザ等伝染病の発生により教職員、保護者の理解を得にくいこと等が挙げられる。

本校では、長年にわたりチャボやうさぎ等の飼育を行っている。平成16年度からは地域の獣医師による支援を受けながら、児童が動物たちと安全にかかわることのできる学校飼育を進めてきた。しかしながら、動物を安全に飼育することが動物ふれあい学習の充実につながるとは限らない。そこで、本校では以下の取り組みを行うことで、児童が動物とすすんでかかわることのできる環境を整えてきた。

- ① 愛育委員会による常時活動と休日親子飼育活動の実施。
- ② 「小動物飼育サポートネットワーク」の構築。
- ③ 生活科指導計画への動物ふれあい学習の位置づけと学習内容の更新。

児童が動物の特性を理解して世話を継続できるようになると、動物たちは「逃げない」「近寄ってくる」「なつく」といった行動を示し、思いを児童に返してくれるようになる。このような他者への思いやりと理解からうまれる豊かな関係の構築は、動物だけでなく人間相互の関係にも適用できることに気づかせていくことが、動物飼育本来のねらいと考えている。



図1：「小動物飼育サポートネットワーク」



東京学芸大学附属小金井小学校 副校長 関田義博

■略歴

1959年生まれ、東京学芸大学教育学部卒業

東京都公立小学校、東京学芸大学附属大泉小学校教諭を経て、平成19年度より現職。現在、東京学芸大学教職大学院特命教授、東京学芸大学非常勤講師を併任。

「わうくらす（和歌山県動物愛護センター事業）」の取り組み ～行政との協働活動～

公益社団法人日本愛玩動物協会 和歌山県支部長 山畑如矢

和歌山県支部は、平成14年度より和歌山県動物愛護センターと共に適正飼養の普及啓発活動をおこなってきた。その一環として、子供たちを対象とした「わうくらす」授業を実施している。「わうくらす」は、動物を通して命の大切さや他者とのかわりを学ぶことによって、子供たちの豊かな心を育むことを目的にスタートした。

実施方法は、学校などの道徳や総合学習の時間を利用し、全10時間の授業を各学校の都合に合わせておこなう。

- (例1) 全10時間を1年間に実施する。
- (例2) 全10時間を8時間に減らし1年間に実施する。
- (例3) 全10時間を1年に2時間ずつ実施して、3～6年で修了する。

「わうくらす」がスタートして早くも12年が過ぎ、初めの頃に授業を受けた子供たちは、もう立派な大人に成長している。私たちが授業を実施していて最も嬉しいのは、彼らが学んだことを実生活において実践してくれていることである。知らない犬との接し方や新しく家族として迎え入れる時の心構えなど、「習ったことが役に立った」と話してくれる瞬間が嬉しい。

今後の目標として、今まで小学校中心であった授業を中・高校に展開していくことである。授業の対象年齢が上がれば、これまでよりさらに深く「命の大切さ」を学ぶことができ、いじめ撲滅への足掛かりにもなっていくと考えている。



図1：「犬の散歩体験」授業風景



(公社) 日本愛玩動物協会 和歌山県支部 支部長 **山畑如矢**

■略歴

1990年よりドッグトレーナーとして活動をスタートする。2001年より(社)日本愛玩動物協会和歌山県愛玩動物飼養管理士会(現在の和歌山県支部の前身)委員長を務め、現在に至る。和歌山県動物愛護推進協議会委員、和歌山県動物愛護推進員。

ペットとのふれあい活動のノウハウと課題

公益社団法人日本愛玩動物協会 山梨県支部 飯島英恵

ペットとのふれあいを通じた活動は、情操教育の一環として教育現場でも導入されることが多くなってきている。

しかし、その活動の多くが外部団体等からの協力を得て行われており、安全対策を含め、子どもを対象とした活動を行うに当たり、十分な配慮がなされているかということにまで、依頼者側の考えが及んでいるかどうかは定かではない。「ペットとのふれあい活動を請け負う団体は動物を扱うプロである」、という安心感を抱いての依頼も多いのだが、忘れてもらっては困ることがある。それは「ペットとのふれあい活動を請け負う団体が、必ずしも子どものプロ、教育のプロとは限らない」ということである。

ペットとのふれあい活動は気軽に行えそうに思われがちだが、生体を介する活動は様々なリスクを伴う。それらのリスクをいかに回避し安全なものとするか、依頼する側と請け負う側の両者が、十分に検討した上で準備することが必要不可欠となる。またリスクに加え、ふれあい活動に適性のある生体であっても、移動や慣れない環境での活動は、生体にとってストレスとなる場合があることを考慮した上で、生体を介さず、代替的な手法を取り入れた活動を行うことも可能であることを知っておいて頂きたい。

生体の介在の有無に関係なく、ペットとのふれあい活動は、情緒や感性にはたらきかけ、自然な形で慈しむ心を育む一助となるような性質の活動であるため、価値観の押しつけとなるような内容では一方通行で終わってしまう可能性がある。食に対するアレルギーや好き嫌いがあるように、動物に対するアレルギーや好き嫌いがあることは当然のこと。そこを否定せず受け入れた上で豊かなもの（活動）にするためには、子どもたちが心の中で、何かを感じ考えられる、「柔軟な活動」であることが大切であり、その点を活動に関わる者の共通認識として理解し、いかに展開させていくかが、今後の課題となるのではないだろうか。



図1：ペットとのふれあい活動と、生体を伴わない活動のメリットと問題点について

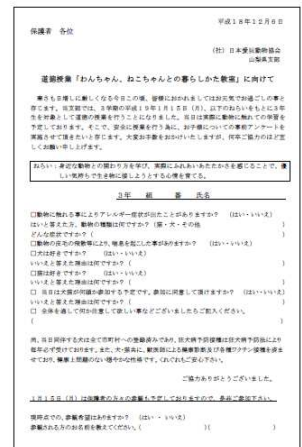


図2：ペットとのふれあい活動を計画する際、必ず保護者に対して行うアンケート調査



(公社) 日本愛玩動物協会 山梨県支部支部長 飯島英恵

■略歴

(公社) 日本愛玩動物協会山梨県支部の前身となる山梨県愛玩動物飼養管理士会が設立した平成14年より活動を開始。山梨県動物愛護推進員としても活動中。本職はデザイン業。

ペットの文化とみらいを考えるプロジェクト

〒106-0045

東京都港区麻布十番 4-6-8 二進ビル4F
一般社団法人ナチュラルドッグスタイル内

TEL 03-6459-4778

FAX 03-6459-4779

E-MAIL petmirai@n-d-s.tv

事務局: 一般社団法人ナチュラルドッグスタイル

東洋大学国際観光学科

公益社団法人日本愛玩動物協会